

高い練度を維持・向上する 自衛隊の訓練・演習

第1節 各自衛隊の訓練・演習

防衛大綱は、防衛力が真価を發揮するためには、平素から絶えずその能力を維持・向上させることが必要であり、自衛隊の**訓練・演習**は防衛力を支える重要な要素の一つであるとしている。

自衛隊がわが国防衛の任務を果たすためには、装備品などの充実を図るだけでなく、平素から指揮官をはじめとする隊員が高い資質と能力を持つとともに、部隊としても高い練度を有することなどにより、堅固な防衛態勢をとることが必要である。堅固な防衛態勢をとることは、わが国への侵略を意図する国に対して、その侵略を思いとどまらせる抑止力としての機能を果たすものである。

また、防衛大綱は、日米同盟の抑止力・対処力の強化として、各種の運用協力及び政策調整を一層深化させるべく、共同訓練・演習を一層積極的に実施することとしており、各自衛隊は、各軍種

間での共同訓練や日米共同統合演習（実動演習及び指揮所演習）を着実に実施している。

さらに、積極的な共同訓練・演習やその際の海外における寄港等を通じて平素からプレゼンスを高め、わが国の意思と能力を示すとしているほか、多角的・多層的な安全保障協力を戦略的に推進するとの観点から、「自由で開かれたインド太平洋」というビジョンを踏まえ、訓練・演習に積極的に取り組むこととしている。

そのため、同盟国、友好国その他の関係国との共同訓練・演習を通じ、わが国の安全保障と密接な関係を有するインド太平洋地域の安定化を図るとともに、一国のみでは対応が困難なグローバルな安全保障上の課題や不安定要因への対応に努めている。

1 部隊の練成

各自衛隊の部隊などで行う訓練・演習は、隊員それぞれの職務に必要な技量の向上を目的とした隊員個々の訓練と、部隊の組織的な能力の練成を目的とした部隊の訓練・演習とに大別される。隊員個々の訓練は、職種などの専門性や隊員の能力に応じて個別的、段階的に行われている。部隊の訓練・演習は、小さな単位の部隊から大部隊へと徐々に

規模を拡大しつつ訓練を積み重ねながら、一つの組織として能力を發揮できることを目標として部隊間での連携などの大規模な総合訓練を行う。

各自衛隊は、種々の制約の中で、事故防止など安全確保に細心の注意を払いつつ、日夜厳しい教育訓練を行い、心身ともに健全で、練度の高い隊員の育成と精強な部隊の練成に努めている。

KEY WORD 訓練・演習とは

練成訓練は、隊員の練度を向上するとともに精強な部隊などを練成することを目的とするものであり、「個人訓練（各個訓練）」と「部隊訓練」に区分される。また、「部隊訓練」は基本的なものから応用的なものまで段階的に進め、部隊に対して組織としての行動に習熟させ、与えられた任務を遂行できるよう練度を向上させる「訓練」と、主に防衛出動など自衛隊の行動時の事態を想定し、部隊の訓練の集大成として、各種の部隊が参加し総合力を演練する「演習」に区分される。

1 陸上自衛隊

陸自は、普通科（歩兵）、特科（砲兵）、機甲科（戦車・偵察）、施設科（工兵）などの職種ごとに部隊の行動を訓練するとともに、他の職種部隊と協同した諸職種協同訓練を行っている。

2020年には、北海道の良好な訓練基盤を活用して連隊を基幹とした部隊が実動による対抗演習を実施するため、訓練評価支援隊を新編した。



夜間射撃能力を向上させる陸自第7特科連隊

2 海上自衛隊

海自は、要員の交代や艦艇の検査、修理の時期を見込んだ一定期間を周期として、これを数期に分け、段階的に練度を向上させる訓練方式をとっている。

この方式での訓練の初期段階では、戦闘力の基本単位である艦艇や航空機ごとの練度の向上に伴って、応用的な部隊訓練へと移行するとともに、艦艇相互、艦艇と航空機の間で連携した訓練を実施している。



訓練参加中の海上自衛官

3 航空自衛隊

空自は、戦闘機、レーダー、地対空誘導弾などの先端技術の装備を駆使するため、訓練の初期段階では個人の専門的な知識技能を段階的に引き上げることを重視しつつ、戦闘機部隊、航空警戒管制部隊、地対空誘導弾部隊などの部隊ごとに訓練を実施している。

この際、隊員と航空機などの装備を総合的に機能発揮させることを目指しており、練度が向上するに従って、これら部隊間の連携要領の訓練を行い、さらに、これに航空輸送部隊や航空救難部隊などを加えた総合的な訓練を実施している。



飛行教導群F-15アグレッサー

4 統合訓練

有事の際に防衛力を最も効果的に発揮するためには、平素から、陸・海・空各自衛隊の統合運用について訓練を積み重ねておくことが必要である。

このため、自衛隊は、従来から2つ以上の自衛隊が協同して行う統合訓練を実施してきており、



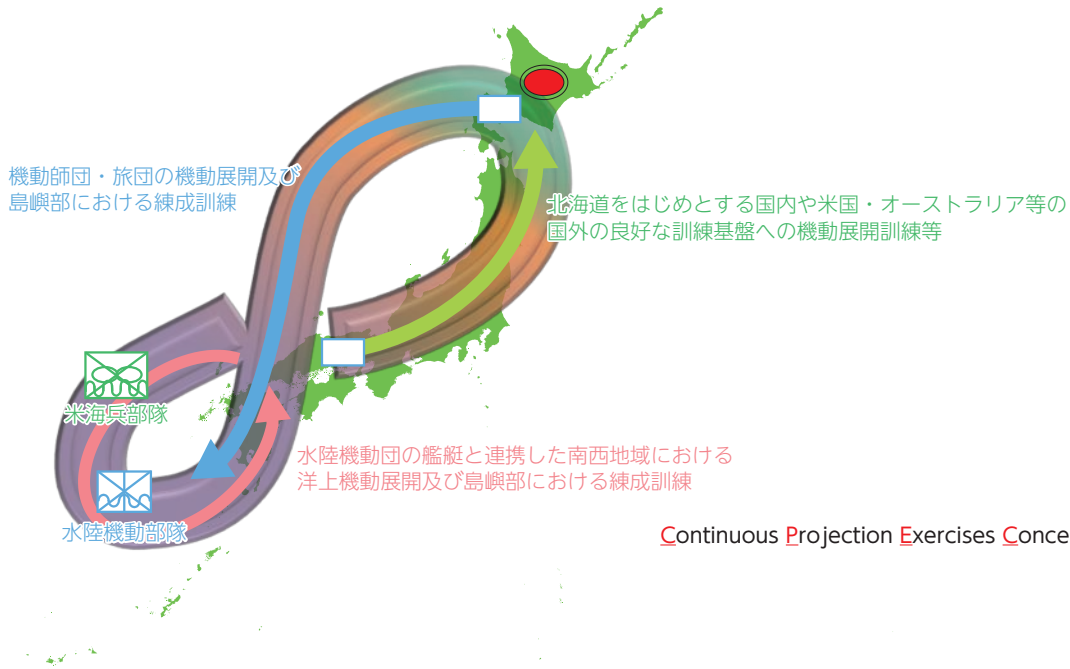
海上輸送、99式自走りゆう弾砲

図表IV-4-1-1 常統的な展開訓練

常統的な展開訓練の一例

○常統的陸上自衛隊展開訓練構想（CPEC）

高い練度を保持した陸上自衛隊の部隊を南西地域等へ機動展開し、練成訓練を実施することにより、抑止力及び対処力の向上を図る



逐次その充実を図っている。

統合訓練は、機能別統合訓練、作戦別統合訓練、統合演習に区分される。このうち統合演習は、統

幕が計画、実施する自衛隊の全般的な対処構想に基づく訓練・演習であり、米軍との共同統合演習を含めて、1979年から実施している。

2 訓練・演習の意義

各自衛隊は、中期防に基づき、水陸両用作戦能力をはじめとする様々な戦術技量のさらなる向上を図るとともに、国内外の訓練環境を活用しつつ、統合訓練と各自衛隊の訓練・演習を有機的に連携させることなどにより、平素からの部隊の迅速かつ継続的な展開の実効性向上やプレゼンスを強化することとしている。

また、各種事態発生時に効果的に対処し、抑止力の実効性を高めるため、このような作戦別の訓練の集大成として、自衛隊の統合訓練・演習や日米の共同訓練・演習を計画的かつ目に見える形で実施し、統合運用能力や日米共同対処能力の向上を図るとともに、これらの訓練・演習を通じて得られた教訓などを踏まえ、事態に対処するための

各種計画を不断に検証し、見直しを行うこととしている¹。

これらの訓練・演習に際しては、各種事態に国として一体的に対処できるよう、警察、消防、海上保安庁などの関係機関との連携を確保するとともに、地方公共団体、民間団体などとも連携を図りつつ、シミュレーションや総合的な訓練・演習を拡充することとしている。

このほか、自衛隊の統合訓練・演習や日米間での共同訓練・演習の機会については、自衛隊の実運用のための計画などの検討・検証のみならず、国民保護を含む総合的な課題の検討・検証の場としても積極的に活用することとしている。

□ 参照 図表IV-4-1-1 (常統的な展開訓練)

¹ わが国への直接の脅威を防止・排除するための演習である自衛隊統合演習、日米共同統合演習、日米共同統合防空・ミサイル防衛訓練などのほか、大規模な災害対処を想定した自衛隊統合防災演習や国際平和協力活動などを想定した国際平和協力演習などがある。

3 各自衛隊の主要訓練

1 陸上自衛隊の主要訓練

陸自は、全国の部隊が実動する陸上自衛隊演習（1982年に初めて実施）や方面隊実動演習、機動展開訓練のほか、米陸軍との実動訓練（オリエン・シールド（国内）や米海兵隊との実動訓練（レゾリュート・ドラゴン（国内）、アイアン・フィスト（国外））及び豪州における米軍との実動訓練（タリスマン・セイバー）をはじめとする米国や諸外国との共同訓練などを通じ、各種事態への対処能力の向上を図るとともに、日米同盟の抑止力・対処力を強化している。

(1) 各種事態における実効的な抑止及び対処にかかる能力を強化する主要訓練

機動師団・旅団が全国に展開する機動展開訓練、西部方面隊をはじめとする方面隊規模での実

動演習により各種事態などへの対処能力の向上を図っているほか、米海兵隊との実動訓練（アイアン・フィスト）を通じて、米軍の持つ実際的なノウハウを吸収しつつ水陸両用機能の強化を図っている。

また、国内における米空軍機からの空挺降下訓練を実施し、空挺作戦に必要な戦術技量を維持・向上するとともに、米軍機による空挺作戦の実効性の維持・向上を図っている。

さらに、良好な国内外の訓練基盤を活用し、特に国内では訓練評価支援隊などと連携した対抗形式による実動演習を北海道で実施し、諸職種協同に係る練度の向上を図っている。

このほか、米国本土においてホーク・中SAM/SSM部隊実射訓練を実施して地対空・地対艦戦闘能力の強化を図るとともに、豪州射撃競技会（AASAM）に参加し、射撃能力の向上を図っている。

		<p>動画：AIRBORNE21 URL：https://twitter.com/jgsdf_1stAbnB/status/1372021173081366532</p>	
		<p>動画：米国における米海兵隊との実動訓練「アイアン・フィスト20」 URL：https://www.youtube.com/watch?v=1Z09vuM-Xdo</p>	
		<p>動画：国内における米海兵隊との実動訓練「フォレストライト」 URL：https://www.youtube.com/watch?v=U3D4C2CalRw&feature=share</p>	
		<p>動画：豪州における米軍との実動訓練「タリスマン・セイバー19」 URL：https://fb.watch/567pKdWffd/</p>	
		<p>動画：インド陸軍との実動訓練「ダルマ・ガーディアン19」 URL：https://www.youtube.com/watch?v=zobSfEAnllc</p>	
		<p>動画：令和元年度米比共同訓練「カマンダグ19」 URL：https://www.youtube.com/watch?v=bal6T2UsDZI</p>	

また、米陸軍との実動訓練（ライジング・サンダー）や豪州における米陸軍との実動訓練（サザン・ジャッカル）などにおいて情報、機動及び火力を連携させた諸職種協同能力の向上を図っている。

(2) 日米同盟による抑止力及び対処力を強化する主要訓練

日米共同方面隊指揮所演習（ヤマサクラ（YS））を日米共同訓練の基軸とし、前述の各種の指揮所演習及び実動訓練を年間を通じて実施することにより、日米共同対処などの実効性の向上や領域横断作戦能力の向上を図っている。

(3) 安全保障協力を推進する主要訓練

印陸軍との実動訓練（ダルマ・ガーディアン）や多国間共同訓練（カーン・クエスト（モンゴル））、日仏米豪共同訓練（ARC21（アーク21））などの共同訓練を通じ各国との連携や信頼関係を強化し、わが国にとって望ましい安全保障環境の創出に寄与してきている。

さらに、英陸軍との実動訓練（ヴィジラント・アイルズ）、フィリピンにおける米海兵隊との実動訓練（カマンダグ）を通じ、米国の各同盟国との連携強化を図っている。



日米共同方面隊指揮所演習（ヤマサクラ）を視察する副大臣、政務官

2 海上自衛隊の主要訓練

海自は、1955年以来実施している全国の部隊が実動する海上自衛隊演習（実動演習）や1980年以来実施している米海軍が主催する多国間共同訓練（リムパック）、2018年以来実施しているインド太平洋方面派遣訓練や2007年以来実施している日米印豪共同訓練（マラバール）などを通じ、日米同盟の抑止力・対処力を強化するとともに、「自由で開かれたインド太平洋」の維持・強化にも貢献している。

(1) 各種事態における実効的な抑止及び対処にかかる能力を強化する主要訓練

海上自衛隊演習（図上演習（日米共同演習を含む。）、海上自衛隊演習（実動演習（日米共同演習及び日米豪加共同訓練を含む。））などにより即応能力の向上を図っている。

また、実機雷処分訓練（硫黄島）、機雷戦訓練（日向灘・陸奥湾・伊勢湾）、掃海特別訓練（日向灘・陸奥湾・伊勢湾）により各種戦術技量の向上を図っている。

さらに、米海軍の協力を得て良好な国外の訓練



日米共同統合演習（キーン・ソード21）に参加する海自艦艇部隊

動画：日米共同対処などの実効性の向上
URL：<https://youtu.be/XU3aulNdvig>

動画：令和2年度機雷処分訓練
URL：<https://www.youtube.com/watch?v=qgdHbRNwprY>

基盤を活用し、護衛艦の米国派遣訓練、米国派遣訓練（潜水艦）、グアム島方面派遣訓練（敷設艦）、米国派遣訓練（航空機）を実施し、各種戦術技量の向上を図っている。

(2) 日米同盟による抑止力及び対処力を強化する主要訓練

艦艇や航空機による日米共同訓練、対潜特別訓練、掃海特別訓練、衛生特別訓練、日米衛生共同訓練により、日米共同対処などの実効性や領域横断作戦能力の向上を図っている。

海自は東シナ海や南シナ海において米海軍と精力的に共同訓練を行っており、例えば、2020年8月には、東シナ海において、護衛艦「すずつき」と米海軍駆逐艦「マスティン」が共同訓練を実施したほか、同年10月には、南シナ海において、インド太平洋方面派遣訓練（IPD）中の護衛艦「かが」と「いかづち」が、米海軍駆逐艦「ジョン・S・マケイン」と補給艦「ティピカヌー」と合流して共同訓練を実施した。

(3) 安全保障協力を推進する主要訓練

インド太平洋方面派遣訓練（IPD）のほか、日米豪共同訓練、日豪共同訓練、日印共同訓練（JIMEX）、日スリランカ共同訓練（JA-LANEX）、インドネシア海軍との親善訓練、日米豪韓共同訓練（パシフィック・ヴァンガード）、日仏米豪共同訓練（ARC21（アーク21））といった各国海軍との共同訓練の実施を通じ、インド太平洋地域の諸外国との信頼関係を構築・強化し、わが国にとって望ましい安全保障環境の創出を図っている。

例えば、2020年9月から10月にかけて、護衛艦「かが」、「いかづち」などがインド太平洋方面派遣訓練（IPD）を実施し、インド太平洋地域に所在する米国、オーストラリア、インド、インドネシア、スリランカの各国海軍と共同訓練などを行うとともに、ベトナム・カムラン、スリランカ・コロンボへ寄港した。

また、同年11月の日米印豪共同訓練（マラバール2020）においては、インド太平洋の主要海域であるベンガル湾とアラビア海北部において日米印豪の艦艇が一堂に会したことを通じて、「自由で開かれたインド太平洋」というビジョンを維持・強化していくという4か国の一致した意思が具現化されたほか、これら4か国の連携・結束が示された。

3 航空自衛隊の主要訓練

空自は、全国の部隊が実動する航空総隊総合訓練（実動訓練）や各種機能別訓練のほか、1996年以来実施している米空軍演習（レッド・フラッグ・アラスカ）や1999年以来実施しているグアムにおける日米豪共同訓練（コープ・ノース）などを通じ、日米同盟の抑止力・対処力を強化するとともに、諸外国との連携強化を図っている。その際、インド太平洋地域での航空機の飛行や寄港を通じて「自由で開かれたインド太平洋」の維持・強化にも貢献している。

(1) 各種事態における実効的な抑止及び対処にかかる能力を強化する主要訓練

PAC-3機動展開訓練、国外運航訓練により機動展開能力、即応能力の向上を図っている。また、良好な国外の訓練基盤を活用し、高射部隊によるペトリオットの実射訓練により、防空戦闘能力を



訓練でミサイルを発射するF-15戦闘機



動画：練度向上のための訓練

URL：<https://youtu.be/6lbU3COUBTA>

強化している。

さらに、米国高等空輸戦術訓練センターを活用し、輸送機部隊の任務遂行能力の向上を図っている。

(2) 日米同盟による抑止力及び対処力を強化する主要訓練

米空軍に加え、米海軍や米海兵隊との対戦闘機戦闘訓練、要撃戦闘訓練、防空戦闘訓練、戦術攻撃訓練、空中給油訓練、搜索救難訓練、編隊航法訓練、米海軍との共同訓練などの各種日米共同訓練により、日米共同対処などの実効性の向上や領域横断作戦能力の向上を図っている。

例えば、日本海、東シナ海周辺空域などにおいて、米空軍B-52爆撃機、B-1爆撃機などと共同訓練を着実に積み重ねている。

(3) 安全保障協力を推進する主要訓練

多国間共同訓練(コブラ・ゴールド)における在外邦人等保護措置訓練、人道支援・災害救援共同訓練(クリスマス・ドロップ)を実施し、各国との信頼関係の構築・強化により、わが国にとって望ましい安全保障環境の創出を図っている。

例えば、2021年3月、C-2輸送機などにより国外運航訓練を行い、ベトナム・ホーチミンに寄航した。これらの活動は、「自由で開かれたインド太平洋」の維持・強化に資する観点から、インド太平洋地域の航行・上空飛行の自由に寄与するとともに、各国との協力・交流の推進を通じて同地域の安定に寄与するものである。

4 統合による主要訓練

自衛隊は、1979年以来、統合運用を演練する自衛隊統合演習(実動演習)及び自衛隊統合演習(指揮所演習)をおおむね毎年交互に実施している。また、1986年以来、武力攻撃事態などにおける自衛隊の運用要領及び日米共同対処要領を演練し、自衛隊の即応性と日米の相互運用性の向上を図るため日米共同統合演習(キーン・ソード(実



日米共同統合防災訓練(TREX)

動演習)、キーン・エッジ(指揮所演習))²を実施している。

(1) 各種事態における実効的な抑止及び対処にかかる能力を強化する主要訓練

統合水陸両用作戦訓練などを実施して、自衛隊の水陸両用作戦に関する戦術技量の向上を図っているほか、自衛隊統合防災演習、離島統合防災訓練を実施し、災害対処能力の向上を図っている。

また、国内における在外邦人等保護措置訓練を実施し、在外邦人等保護措置に関する統合運用能力の向上及び自衛隊と関係機関との連携の強化を図っている。

さらに、従来領域における訓練・演習に加え、新たな領域にかかる体制の充実に合わせた総合的な訓練・演習を実施し、わが国防衛を任務とする自衛隊に必要な練度の維持・向上を図ることとしている。

(2) 日米同盟による抑止力及び対処力を強化する主要訓練

日米共同統合演習(キーン・ソード(実動演習)、キーン・エッジ(指揮所演習))を実施し、各種事態における実効的な抑止及び対処にかかる能力を強化するとともに、日米共同対処能力の向上を図っている。また、日米共同統合防空・ミサイル防衛訓練を実施して日米共同による弾道ミサイル対処や防空戦闘能力を向上している。

例えば、2020年10月から11月にかけて実施

² 全自衛隊と米インド太平洋軍が参加する本演習は、おおむね毎年、実動演習と指揮所演習を交互に行っておりこれまで合計15回実施した。2020年の訓練においては、一部の訓練にカナダ海軍が参加したほか、英国、オーストラリア、フランス、インド、フィリピン、韓国からのオブザーバーを受け入れている。

したキーン・ソード21では、陸自と海自による水陸両用作戦に加え、空自が参加して統合火力訓練を沖大東島射爆撃場で実施したほか、鹿児島県十島村の臥蛇島において、統合訓練として初めて日米共同での着上陸訓練を実施した。この着上陸訓練は、普天間飛行場に所在するMV-22による米軍再編にかかる訓練移転として、日米共同訓練を行うとともに沖縄の負担軽減も図るものである。このほか、キーン・ソード21には同年5月に新編された空自宇宙作戦隊が初めて統合訓練に参加し、宇宙状況監視について訓練を実施したほか、サイバー攻撃等対処、電子戦といった新たな

領域における統合運用要領を演練した。

(3) 安全保障協力を推進する主要訓練

多国間共同訓練（コブラ・ゴールド）やパシフィック・パートナーシップ、国際平和協力演習ADMM、拡散に対する安全保障構想（PSI）訓練への参加により、在外邦人等保護措置に関する統合運用能力や国際平和協力業務に必要な各種能力の向上を図っている。

□ 参照 資料19（主な日米共同訓練の実績（令和2（2020）年度）

資料46（多国間共同訓練の参加など（過去3年間）

4 練成訓練の客観的・定量的な評価

自衛隊では、部隊などの練成訓練の成果を評価するとともに、その進歩・向上を促すことを目的として、各幕僚長以下の各レベルの練成責任者のもと、訓練検閲を実施している。

また、その練度の評価にあたっては、部隊訓練基準などの評価基準を活用するなど、客観的かつ

定量的な評価を実施している。

例えば、陸自は、訓練の実施にあたって、可能な限り実戦に近い環境下においてレーザーを使用した交戦訓練装置を活用することなどにより、訓練練度を客観的かつ定量的に評価することとしている。

VOICE

陸自の任務遂行能力をさらに高める訓練評価支援隊の訓練に参加した連隊長の声

陸上自衛隊第39普通科連隊長（青森県弘前市）

1等陸佐 木原 邦洋（現所属：教育訓練研究本部）

令和元（2019）年度、富士トレーニングセンター（FTC）での訓練で大きな戦果をあげ、また、米本土で実施した米陸軍統合即応トレーニングセンター（JRTC）での日米共同訓練に参加した、第39普通科連隊にとって、北海道トレーニングセンター（HTC）での訓練は、その集大成となるものでした。各訓練には、それぞれ目的や狙いに基づき厳しい訓練環境が設定されていましたが、「戦場」という意味では、HTCでの訓練は最も過酷な環境でした。訓練期間は、準備や約1,000kmの長距離機動を含めると約1か月、敵と戦闘する期間は9夜10日にわたり、訓練間の状況は途切れることなく続きました。遊撃活動や情報収集を任務とする隊

員は、水や食料が無くなりながらも任務を継続しました。

訓練は対抗方式で行われ、相手の部隊は、陸上自衛隊唯一の機甲師団の部隊でした。あれほど沢山の戦車や装甲車と対峙するのは初めての経験であり、轟音とともに攻撃する迫力や不整地を前進する能力は、日頃の訓練とは比べ物ならず、若い隊員は、震えながらも必死に対戦車火器を構え、配属された協同部隊も装備上の不利がある中においても、第39普通科連隊と共に全力で戦ってくれました。

これらHTCでしか経験できない訓練を通じて、連隊はさらなる精強な部隊を目指すための「本物の指標」を得ました。今回の運営の教訓が、今後の運営に反映され、陸上自衛隊全体がさらに精強になることを確信しています。



障害設置を行う隊員の様子



敵に応戦する機関銃手の様子

第4章

高い練度を維持・向上する自衛隊の訓練・演習

VOICE

護衛艦隊の各種戦能力の向上

海上自衛隊水上戦術開発指導隊司令
(神奈川県横須賀市)

1等海佐 本山 勝善
もとやま かつよし

海上自衛隊はいかなる事態においても適切に対処できる能力を保有するため4つの分野(「人」「機能」「構想」「協同」の充実)に努力を集中し、任務の完遂を目指しています。

水上戦術開発指導隊(以後、戦術隊と記載)は、戦略・戦術などの分析・開発、作戦や装備開発能力の向上にかかる態勢を整備するとともに、蓄積した知識・経験を適切に管理共有することにより、艦隊の能力を最大発揮し、従来とは異なる発想を含めて、4つの分野の一つである「構想」の充実を具現化する部隊として、2020年10月に誘導武器教育訓練隊を母体として新編されました。

戦術隊の任務は、前身である誘導武器教育訓練

隊の任務(誘導武器システム等に関する教育訓練)に加えて、水上戦術(BMD、対空戦及び対水上戦)の開発・改善、その他の各種戦における護衛艦等の運用の改善、それらに関する訓練指導です。

海上自衛隊が任務を完遂できるかは、戦略・作戦・戦術の適否によるところが大きいいため、技術の進展に伴う装備・戦い方をめぐる環境の変化に応じた柔軟な発想を大胆に取り入れつつ、限られた資源を有効に活かし、闘い／戦いに勝利しなければならず、戦術隊隊員一同、精強な艦隊のため、水上戦術の開発・改善に鋭意取り組んでいます。

また各種戦術を場面に応じて選択、活用するのは運用する人であり、戦術隊は、各種戦術に関する知識、過去の教訓などをしっかりと蓄積管理し、訓練指導などを通じて艦隊内で共有するとともに、その確実な定着に尽力してまいります。



艦上において訓練指導中の筆者(手前左から3人目)



水上戦術開発隊開隊時に庁舎前にて